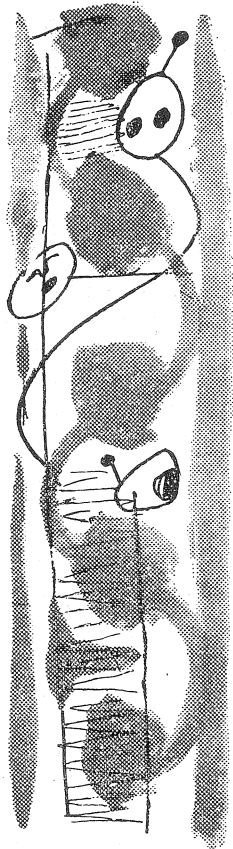


文部時報

966号

1958年3月



Shige

— 32年度文部行政の回顧と展望 —

初等中等教育局	2
大学学術局	15
社会教育局	26
調査局	38
管理局	47
文化財保護委員会	57
ユネスコ国内委員会	62

— 随筆 —

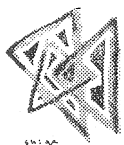
予算屋の独語	天城 勲	13
へき地に思う	上野芳太郎	23
すぐれているものとかけ がえのないもの	西田亀久夫	34
音楽随想	諸井 三郎	36
無視されがちな大問題	白石 大二	45

勤務評定の実施にあたって	木田 宏	70
教職員勤務評定に関する論争と その問題点	増田 幸一	75
文部省重要通達のなかから	編集後記	66 87

— 追録 — 道徳(小・中学校)実施要綱(全文)

— 昭和33年3月18日付 —

音楽随想



諸井三郎

ここ数年のあいだに、ヨーロッパやアメリカの代表的な交響管弦楽団が来朝し、わが国の音楽ファンは、これまでレコードでしか聞くことのできなかつた一流楽団のすぐれた演奏を、じかに聞くことができ、大いに楽しみ、また啓発されたわけである。そして専門の音楽批評家も、音楽ファンも、それらの楽団に対していろいろの意見や感想を發表しているが、それを知ることには、たいへん興味深い。すべての意見が一致しているわけではな

いが、代表的なものをあげてみると、アメリカの交響楽団の演奏は、音そのものは質的にも量的にも非常にすばらしいが、しかし何か精神的にみたされないものがあり、現代的な演奏の一つのはっきりしたタイプとは思われない、完全な共感を持つことはできなかった、という感想が多いようであった。また、ウィーン・フィルハーモニーの演奏は、なんといつても音楽の伝統を感じさせる美しいもので、演奏そのものが伝統にもとづく強い個性

を持っており、非常にりっぱであるが、しかしそれに近付いて、その特徴をわが国の管弦楽団のなかに取り入れるということは、ほとんど不可能である、という思いをさせた。これに対し、昨年の末に来朝したベルリン・フィルハーモニーは、最も大きな感銘を、専門家にも愛好家にもあたえたようである。とくに、合奏技術の卓抜き、演奏における自覚性、音楽のなかに深く食い込んでいく力などにおいて、強い印象を作り出した。それとともに、この交響楽団のような演奏をきくと、わが国の楽団も勉強していけば、そこまで到達することができるのではないか、という希望を持たせようである。このように、三つの交響楽団に対し、それぞれ興味深い感想が示された。

私自身の感じからいえば、ベルリン・フィルは、ドイツ留学中何十回となく聞いており、いわば私の、オーケストラというものについての概念と音感とは、ベルリン・フィルでできあがったようなものだから、この楽団の演奏に最も強い親近感を持つのは当然である。ちやうど私がベルリンで勉強していたこ

ろは、フルトヴェングラーが常任指揮者をしてきた時代だったので、ただオーケストラを学んだだけでなく、音楽そのものについても、非常に多くのことを、この交響楽団の演奏から学んだわけである。ウィーン・フィルも滞欧中何回か聞いたが、ベルリン・フィルに比較すると、はるかに柔かいという感じがする。どちらも世界一流であることには変わりないが、しかしその特徴には、かなりの相違がある。先ごろ来日した時のウィーン・フィルは、全員の編成ではなかったし、指揮者も専門家でなかったのだ、その真価をじゅうぶんに示すことができなかつたのは残念であった。

このように、ベルリン・フィルにしても、

ウィーン・フィルにしても、それぞれに個性があり、特色があるが、しかしヨーロッパに育った交響楽団である、という点では多大の共通点が見いだされる。その点、これらの楽団の演奏を、アメリカのそれに比較して見ると、よくわかってくる。前に書いたアメリカの交響楽団に対する一般の感想は、その相違を日本人的な感じ方でいいあらわしたもので

あるが、私もアメリカの交響楽団については、音そのもののすばらしさに比較して、精神的な満足を感じようぶんにうることができなかった。しかしそれだからといって、アメリカの交響楽団が、ヨーロッパのそれより劣っている、と判断するわけにはいかないように思う。つまり音楽というものに対する考え方が、深いところで違っているから、そのような相違が生れてくるので、そこにはいろいろと研究すべきものがある。したがってその相違は、音楽の優劣という角度から追求してみても、私たちの音感や、音楽性との関係という角度から追求してみることが、おもしろい結果を得られるように思う。

一般的に私たちが日本人は、音をただ音として楽しむというより、音が物語る人間の心持を味わうという態度を、音楽に対して持っている、といえるのではあるまいか。このような特徴は、前にあげた意見や感想にもあらわれているところだが、そうした態度が、私たちがヨーロッパに近付けている原因のように考えられる。私がよく聞いた話に、

非常に高い精神性を持っているパッサの音楽を、日本人がよく理解するのは、不思議でもあるし、驚くべきこともある、ということであつた。このようなことを私は滞欧中にしばしばドイツ人から聞いたが、あるいはドイツ人にとつては、そのような感じがするのかも知れない。しかし日本人の音楽に対する態度の特徴を考えると、これは決して不思議なことではないように思える。むしろパッサの音楽などは共感を持ち易いのであるまいか。

しかし音楽に対して同じように、精神的な態度をとるといつても、もう少し細かく見ていくと、そこにはいろいろな相違も発見できるので、やはり日本人には日本人独特の音楽に対する態度がある。このような問題を深く、また具体的に研究してみることが正しい音楽教育を行い、私たちの音楽的水準を高める上にたいせつな問題であると思う。

(文部省 社会教育官)

編集後記

○三十二年度も終ろうとしています。本年度の仕事をもとめ上げるため、新年度の準備のため、各局課はなかなか忙しい日々です。なかでも教育課程改訂、「道徳」の時間の特設の大問題を一応軌道にのせた初中局のかたがたの忙しさというものはちよつと類のないほどでした。

さてその道徳指導要綱ですが今月号発行が遅れたついでにこの編集後記のあとに、全文を増頁して掲載しました。ご利用下さい。なお別冊としてもお分けしますからご希望の方は発行所にお申し込み下さい。(定価二十円送料八円ただし十部以上は送料不要)

○四月号は改訂される教育課程の基本方針と、各教科における改訂の主眼点についての特集といたします。

(K)

<p>購 読 料</p> <p>定価 一冊六十五円 送費 〃 四 円 一か年 七百八拾円 (送料不要) ただし増大号・臨時号の場合は別に代金を申しあげます。なお、購読の申込みは、直接発行所、またはもよりの書店にお願いします。</p>	<p>ME J 8806</p> <p>文部時報三月号 第九百六十七号 昭和三十三年三月五日 印刷 昭和三十三年三月十日 発行</p> <p>著作権 所有 文 部 省</p> <p>東京都中央区銀座西七の一 発行者株式会社 帝國地方行政学会</p> <p>印刷者株式会社 行政学会印刷所 東京都中央区銀座西七の一 発行所株式会社 帝國地方行政学会</p> <p>電話(57)二二六〇九 振替口座 東京五七一</p>
--	---